

# カタクダンスの 表現特性に関する一研究

石黒 節子  
糟谷 節子  
森田 恵美

## 1. 研究目的

本研究は、カタクダンスの上演形式のなかでのGANESH, DURGA, CRISHNA VANDANAについて、その情緒構造と動きの流れとの関連を検討し、カタクダンスの表現特性を探ろうとするものである。

※分析に使用したダンスフィルムは昭和59年6月に来日したロヒーニ・パテ女史の上演形式を16ミリフィルムに収めたもの。

※情緒の印象構造：石黒・糟谷「身体表情の因子分析的研究」参照。

## 2. カタクダンスの概要

カタクは、インド北西部ジャイプール、ニューデリーを中心に伝承されている軽妙な足運びと回転に特徴をもつ舞踊である。

Bharata Natyamが女性によって踊られるのに比べ、カタクは男性によっても踊られる。物語(Katha)が、語り手(Kathika)によって踊られ、舞踊家と音楽家の共同体であるKathakasの舞踊演奏会がKathakとよばれるようになった。

カタクは、寺院舞踊として発展した。A.D. 8世紀ごろ侵入したイスラム教徒は、ヒンズー教のテーマを理解しなかった。しかし、ムガル帝国3代目の王アクバル(1542~1605)統治下で宮廷舞踊として盛え、これは18世紀後半ムガル帝国衰退までつづいた。

カタクの復興は、LocknowとJuipurの2つの流派に負っている。現在の形式は、LocknowのWajid-Alishah(1847年王位に着く)につかえた宮廷舞踊手Binda Din及びKalkaprasad兄弟により形成された。

## 3. カタクダンスの技術

カタクの技術は、世界最古の演劇、舞踊音楽の理論書である「Natya Shastra」に基づき、NrittaとNrityaから成る。Nrittaとは抽象的で意味のないリズムカルな動きであり、Nrityaは顔の表情を暗示的に使い、手足を象徴的に動かし、物語の意味や趣旨を表現し、暗示する。カタクではこのうちNrittaが中心で、複雑に構築された時間尺度に、装飾的な動きと長い休止(間)、電光のよう

表1 技術の種類と分類

Nritta	Nritya
1. Ganesh Vandana 2. Amada 3. Thata 4. Natwari 5. Paramel 6. Paran 7. Kramalaya 8. Kavita 9. Toda, Tukada 10. Sangeeta 11. Padhant (M. S. kalyanpavkar)	1. 音楽の形式による Bhajan Thumri Thymri Andaz Duscls 2. Bhava, 詩の表現 Kavita Tova 3. マイムを中心とした表現 (主に顔の表情) Hori Gat Kiliya Mardana Gat Abhisarika Gat Palta of Gat (Moham Khokar)
—Hasta(手の動き)— 1. Swabhavika Hastas 2. Hastas Vibrant with Life 3. 示唆的身ぶり 4. 装飾的身ぶり (Maya Rao)	

Classical and Folk Dances of India; D. G Vyas,  
M. S. Kalyanpavkar

な回転が挿入され変化をもたらす。

伴奏音楽は、タブラ、パクアージなどの打楽器がNrittaのリズムを、サーランギ(弦楽器)は哀調をおびたメロディーを奏でる。

## 4. 研究結果 — 表現技術について

◦GANESH(ガネーシャ神)

障害と困難をとり除き、豊作をもたらす幸運の神ガネーシャは、前奏(52秒)のあと、歌に沿って踊られる。動きは象の形や歩き方を象徴的に示すNritya(2分25秒)のあとに太鼓のリズムによるNritta(42秒)が続き、終りのポーズ(Sum)で終る。この踊りの印象構造は図1-1であり、情緒は不快—沈静方向のベクトルを示した。これら情調を表す動きの流れは、Nritya, Nrittaとも持続的・減速的である。(図1-2)

◦DURGA(ドゥルガ神)

シバ神の妃にあたるこの神は悪を亡ぼす力強い神であり、激質、暗質、純質を示すといわれる。間奏(30秒)のあと、歌に沿って激しく踊られる。動きのエフォートはpressing, slashingである(1分4秒)。この後、太鼓によるNrittaが続く(47秒)。印象構造は図2-1であり情緒は不快—緊張方向を示した。動きの流れはNritya, Nrittaとも急激的停止である。(図2-2)

◦KRISHNA(クリシュナ神)

ビシュヌ神の化神とも云われ、ヒンドゥー神話の主人公である。強い一方、優しい面と艶やかさをもつ、横笛を吹く雅やかな姿勢が特色である。間奏(33秒)のあと歌に沿って踊られ、動きのエフォートはfloating, Wringである。その後太鼓によるNrittaが続く(56秒)。印象構造は図3-1であり、情緒は不快—外向であった。動きの流れはNritya, Nrittaとも速・遅・速の流れを示した。(図3-2)

## 5. 結 び

3つの神様に捧げるVandanaは、共通に人に不快を伝える情緒構造をもち、そのなかにガネーシャの沈静、ドゥルガの緊張、クリシュナの外向が固有の特色として把握された。又、これら情緒は、動きの流れと関連し、ガネーシャにおける持続的減速、ドゥルガの急激的停止、クリシュナの速・遅が特色として得られた。カタックにおいては、夫々の神が異なった情緒性を示し、これらが動きの流れ(間)と深い関連をもつといえる。

## 主要文献

- D. G. Vyas, M. S. Kalyanpurkar  
"Classical and Folk Dances of India."
- Rina Singha & Reginald Massey  
"Indian Dance."
- 中西武夫編 "東亜の舞踊" 教育図書株式会社
- 立川武蔵, 石黒淳他 "ヒンドゥーの神々" せりか書房
- ルシル, シェルバーク, ライフ人間世界史18巻インド
- 穂山貞登, 石黒節子他 "印象構造のヴァリエーションに関する研究" 東京工業大学人文論叢

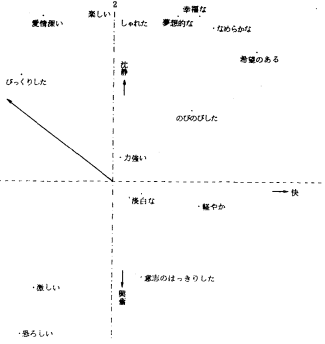


図 1-1

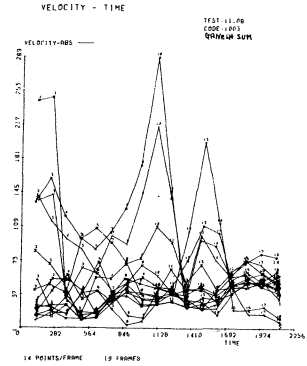


図 1-2

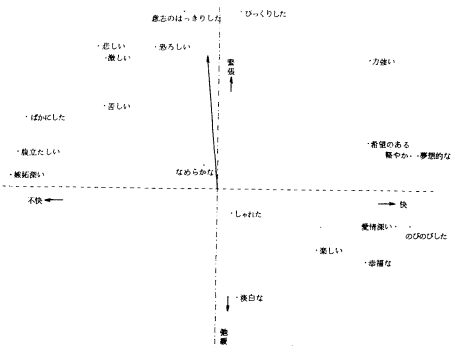


図 2-1

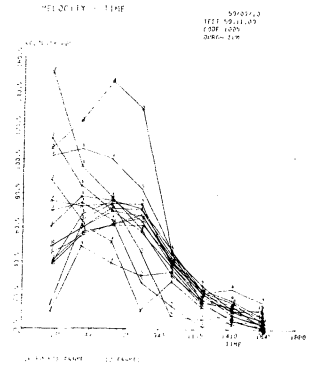


図 2-2

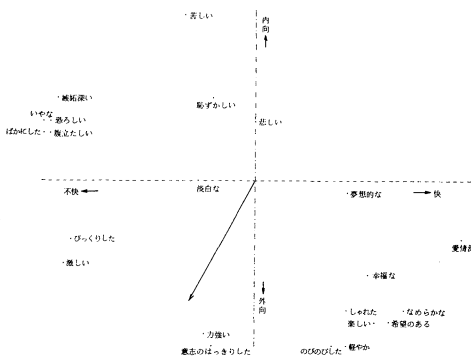


図 3-1

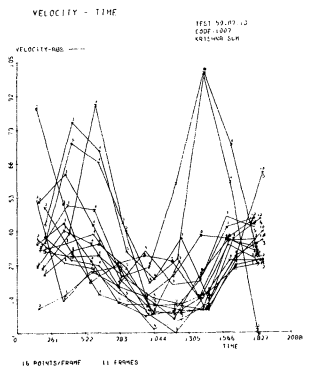


図 3-2

( 図の説明 )

- 図 1-1, 2-1, 3-1 は得られた因子のうち貢献度の多い順に横軸に第 1 因子, たて軸に第 2 因子を示す。
- 図 1-2, 2-2, 3-2 は身体各関節部の動きの速さを示す。